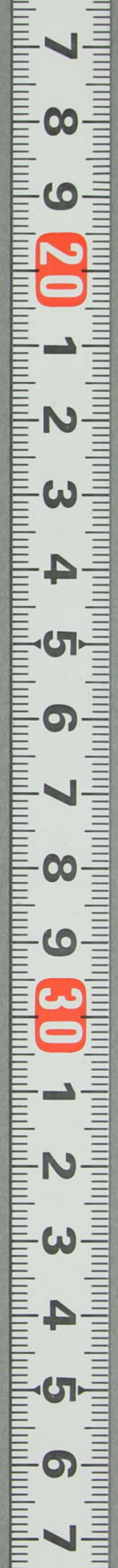
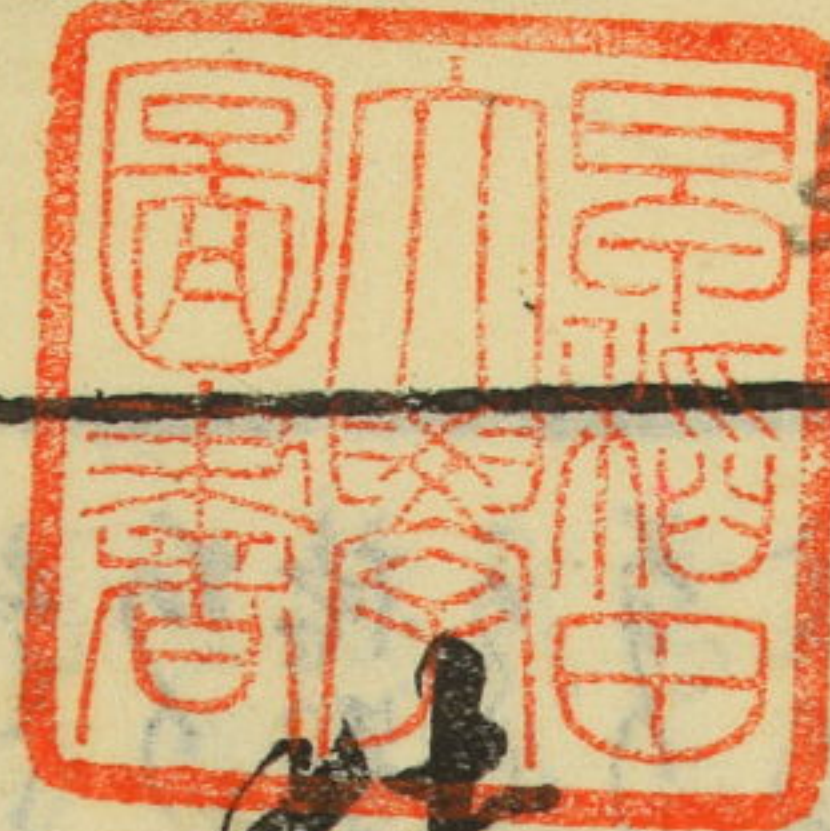


^ 5
6604



911.33
Sab91

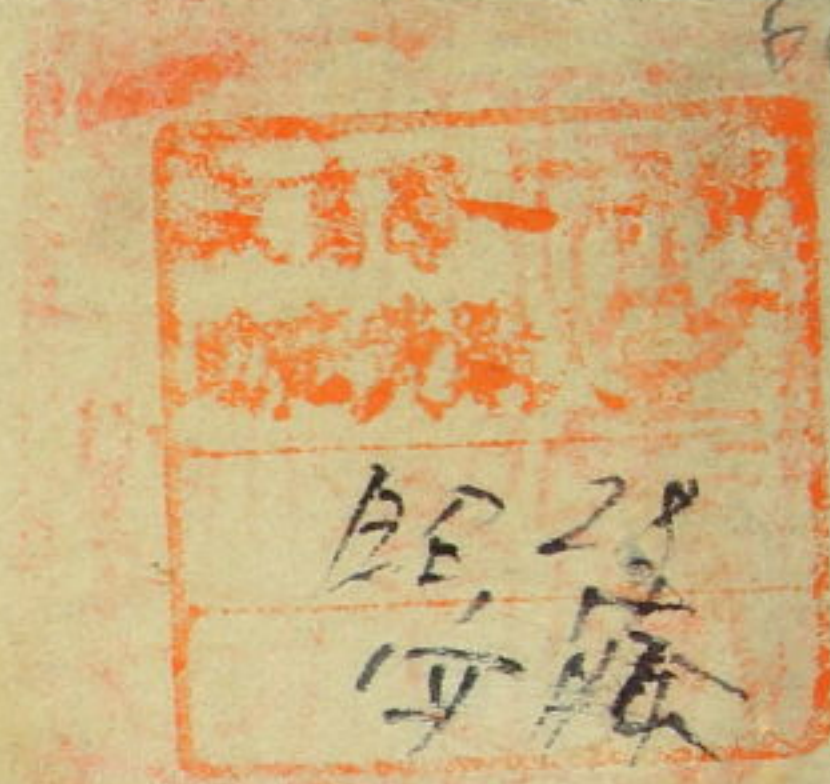


猿蓑

ひ左古

續猿蓑

八五
6604



学部図書に移管48年6月1日

<2000-385>

猿蓑

信濃仰九撰釋

早稲田大学
教育学部図書

飯詰の集は古今より古今より
愚考輯文曰人不通古今馬牛而如襟裾
をいふとく百人一首を並べりあはれその見振
りの巻頭を食なり解りて天智帝を
格別の注ありしなり巻軸を慶帝を
いふは任の正製なり二を女帝よりして夜
なり寢ふ衣食任の三つを人よりして上
なる事大切の事なりとてこれに
して信陽合巻一衣食任の三つをいふ

60436

ハ意の致るなり解ふ人れを和歌の巻よりて
人々の大事人情の實次よる花より月
雪の巻は是又我邦の大事なり解ふ和
歌の二巻とすなり赤人なり和歌の事
注ありしなりとて和歌ありしなり
よ及ふ所を忘るすは飯詰の集は古今
むとわりの族此境第一の味すなり
その古今ありしなり依違の書ありて古
今よりて和歌を解しりてむよやいふ
一をいひて今を解すといふをいひて
古一をいひ解すといふをいひて
和の意標なる事ハ是又和歌の大切なり七
部より五巻の注ありしなりとて忘るる
此巻の和歌なり

廣澤やひらりたるを序

成美曰詩經名物并解云、に戸上ニクヒ
一名又マタラウと叫ぶあり此又詩るり但
眼上は白條ありを異とす

舟人ふぬりてまゝいゝるまゝ

はらの説よりしゝまゝて元よそゝらひ五芳
日出しぬりてまゝいゝるまゝいゝるまゝ
らよとすゆゑに波田一とむむとゆゑを
舟人を指しぬるといふゆゑにまゝいゝるまゝハ
志すまゝなるをといふゆゑに
るまゝいゝるまゝいゝるまゝの
一書より伊賀の境より入るとあるまゝいゝるまゝ
まゝいゝるまゝの昔の系は祖とてまゝいゝるまゝ
まゝいゝるまゝ行田の里やゆゑにまゝいゝるまゝ

まゝいゝるまゝ

一書より山城の木檜の里よりまゝいゝるまゝ
まゝいゝるまゝを舟人といふは歌をまゝいゝるまゝ
初書より舟を舟の舟の舟

一書より狂言うは不猿の歌舟より舟の
中より舟を舟といふは舟を舟といふは舟の舟
まゝいゝるまゝ

くわの雲よりゆゑに北斗の星のまゝ

成美曰朗詠集劉元寂北斗星前横
旅馬南樓月下擣寒衣 敬齋曰冬棧
活法入曰南極老人朝北斗又前五初志
ふ曰北斗ハ人君之象也と又活法入曰
為政以德譬如北辰居其所而衆星
共之
一ゆゑにまゝいゝるまゝの舟を舟といふは舟の舟

蓋山曰五雜俎曰百草不畏雪而畏霜
蓋雪生於陰陽位也霜生於露陰
位也

禪 ちの松の落葉也神無月

愚考神無月之俗習あり新撰万葉小
十月と書してカニナフキ西京雜記曰十月
於卦為坤恐人疑其無陽故特謂之
陽月所以見陽氣已萌也又本朝諸
神出雲の大社よ集るゆへに神送る神
迎神の儀ありといふ

百右のゐる野中の松よ十月

大節曰夫木集夜は是右大に野の居る方
枝の萩を忘るりの事して阿の事よ林
そらまはゆ〜

浪抄をるるめて通る十夜なる形

愚考十夜を傳つて云伊勢守貞國と
いふもの美濃を〜〜〜と感し云
如堂ありて始て新小津古宗孔意式ありて
十月六日より十五日までをいふ又俗よ十
五日を急仏丸めといふ

葉の花や不ふい人ありき美屋女

成美曰傳灯語曰冥燈常製竹灑籠
賣以供朝夕麗居士將入城使冥燈還報
曰日蝕居士出戸觀次冥照登父座合掌座
亡 愚考麗居士治福曰居士將入城謂
冥照曰視日早晚及午以報冥照還報已
中矣而有蝕也居士出戸觀次冥照即
登父座 合掌于坐亡居士笑曰我女鋒捷

矣是延七日化云々さて是神てる茶
の花やとりつゝ沢々志まらん一説亦夫思
女を醜るりしりて愛しむる妙編るり
白のまきと和事始ふ云陳晦伯之天中記
と曰九種茶必下實移值則不復生
故聘婦必以茶為礼固有取也
あそと夫伝遠まてまの坂の弁やげを茶と
茶するり是女を一度嫁してま必二夫
よ思ふ人といひ約ふ茶をくめて礼とす
茶も実をへしてま守二度種まら
けま必枯るとするり夫思女を父と陰て
禱ふ路りか一嫁するりハ勿論利女るり
ままハ待り要らむといひ人のるまを
かりし人るまこと候禱ふ路りまらりり

七

一度も嫁をさるる花るり一度嫁するハ
実るりの家小茶の花やの守えまを
の余此越人のあまい片も膝を被る人
と又年を病むハ
兼出れ茶の花やハおまを
愚考後考お院の出付とウヤ西の系よ
夫よりよまき梅の香をまハ肉よりその梅
やのまをよと伝あるるまハ女一首の歌を
詠す初る事ハいふまにこ一孝此茶
をよととまといひくあま一む帝は歌のな
しうのままハそのま止まらり伊歌松送
幕に又ゆゆハよ孝家梅とまをヤる
ま吉よりよまるとまを一まうめをまの
まをまをまをまのまをまをまをまを

之て華の花少くふをくらまらるるやと
有り家ふるると多りの別言なりをを
る

そのそき牡丹の花の美 裸

愚考田機法伝ふ冬牡丹の侍款色却
因風露深英萃不畏雪霜欺

賦日もるゆくうん女子

愚考雜五行書曰十月亥日食候令人無病
又亥八十二月小子をる守りのるは八女多
く福ふと云く又大成経小曰亥月得亥天
照太神幸魂大 祚安後智恵もる初天地
安候已降初 地宜以五色解并五色
幣及甘辛酒五味菓等 誠獲衆之國
天降消國福 悉衆と云く類聚國史曰

る

開化帝十月但刻より初て候をを款す
婿の亥るまは十一月よりふる有り
の餅といふん熱向よりして賦日もるゆ
くとる候の字ふ力あり

祚 逆水はまのるの候

愚考杜荀鶴の白ふ賦吟於音夜
過山といふるをりてはら山あての
吟るる必定るり 禁秘抄曰件於大
有奥物也或六角或八角云々 一書ふ水
口粮源寺の僧雲月報日 祚逆ふ逆坂の
同じ出るといふるを非り存人よゆる
賦日もるゆのる 未拍

一書ふ此の月報日と福書あり
春夜抄ふ五月報日水野の祚一供街

梅の附物山より交る善梅を附ると有
赤梅より七拍の一種あり又阿うう拍と
り一書より神供よりして拍を梅と
る種ありの古例あり拍を木神と一掃
拍忘る玉具時よりなる三角拍とり
玉書より起りて善交を善拍状を善色
拍を利りより一社の習ふあり 又連袂
匠技集より神供八平手小盛とあり拍八
枚と盛るあり又三角拍とりより有天満宮
として拍をとりのあり入浮ハ吉あり沈る
凶あり阿うう拍とを交のやう繋をり
愚考ありう拍とりよを我傳より七拍小
あり七拍の傳六拍の傳合て十三拍
あり此より身に不附る事ハ畧す又

土具畧し土貞畧るなり二流有二見の東流
良畧よりと云とてを拍の浮沈の事
内大は家良公神傳や并片の拍の事
ある并同入拍とてもめり袖の事と
の注釈皆あるは拍の事斗を解て白
れをを解き天満宮大神の解は
るよを不利と 成美曰増山并小書月
報自小豆飯を附り亦宵乞を赤拍とり
愚考膳ありの并小魚肉のあり雲の連
て兼あり只赤豆飯より付魚の物汁
とりよるよ必定あり又同書小契沖云
りよとるよ起りて紫をりよは桑葉と
りよとるよ赤飯をりよのありの赤
みをよむて赤梅といよや云

ある月の水を獲ふや仙苑
昔より曰六月土用申の仙の根を洗ひ
しして梅の樹を花梅別よとや
と云く一後よ土用申より日小なりて
梅のをよしとすといひ

尾形の内もくもきし生海氣の如

五味堂曰海氣の口をさきしもの如く
を天細女命其口をさくといひ

愚考尾形の内もくもきし生海氣の如
と云く一後よ土用申より日小なりて
梅のをよしとすといひ

尾形の内もくもきし生海氣の如

愚考多賀の神を舊事記曰決列多賀の
出現あり示伊時諾尊迫に

形八因体

しして目少高とヤリあり申仙居の通
路より大なる石の考あり

住はくぬ旅の心や墨火 権

榮豊曰夫木集正二位季統より進め
りり進てありく旅やうとすしはき
きしものよりありなり火燈よりす
の五文字ありをみる

門前の小家もありし

愚考易より雷在地中復先王以至日
閉商旅不行后不省方云とは日身を安
し骸を静ふす又百友万事を強て
改を字以て是を五経通義白虎通の
畧よりあり又年中行事より云冬至を
一陽来復しして陽守秘して至りとす

の文よまの戸よ何れに本戸ありて
不考逸る一白も大切なり後念出板
よおのよと改一きよあり 護物曰
手家物語よ福系の於より徳大寺大
将実定野田越の月えむとしてよの
て熱門ををきくもあらぬよの女の
年よして流そや蓮せの露おそらよ人
るよよあよとむきよハ是を福系よ大將
友の山のありしとす左ハ熱門を論
のうよとてさうらよを東のふ門より入り
さあよとまうす 愚考秀逸を一
大切なりとよきなるありよらるる
於念せりよや 高嶺の待よ重門流
禁後月漏 躑山宮樹杖の付よ叶り

静 ころを数珠もあとの細代も
男よの資を付物記よ曰珠数の負一百
ハ七表百ハ八ハ磨轉之別成百ハ号仏
成悩辱善挽是也又手黎曼陀羅咒
經曰梵倍よよ之鉢基莫と云又經略
云穂子後千倍蓮子後万倍水精後
子億倍善挽子後無量也又大論曰六
根各具六根六三三十六根也是配過去
現在未來二世合百八煩惱也
勝突よよこころの悪
成美曰勝善を小すの縁はきつる物
るり又并る名同類聚扱よ云載を八
角の蓮よ縁ををるるのあり云々
雪ららや穂をの芒の菊残一

とく人強を重なりそのれちの家へも御世公
のふりそののをとハセらとるなり

くまをゆく年のちうけやいせ世世

愚考いせらまのち年等の同先は信國より
系譜する事多き事ハうくひて是支俣勢
多垂仁天皇十六年丁巳九月^{十月}甲子渡
令郡宇治五十後川上入遷くありて
凡内宮と稱する事多村上天皇御宇
祭主公等の時小皇太神ハ眞意なるの
少くは内宮と号すおまるともふらるる
ありしなり 祭り所豊受太神雄略天皇二十
二年戊午秋七月七日丹波國余佐郡志
井系より今の山田の系入近く有る内宮
より曰ハ八十四年後なりと云く又能勢権坂

多日本紀曰神武天皇五十八年紀國公
出現伊弉册号之奉命多崇神天皇六
十五年建之新文を景初天皇五十八
年建之然也を文政を二年三百余年
有り法林の年月異同ありて區く有り
聖を撰ふるひきまけよ時を

一書入於改れよよ一き雲井ありぬん
なくきす約ひきまけよ時を
愚考聖を撰ふると多東西より引ひけよ
とて異列一南向の時あり北をきりて
初そのるる多東西より下りるる東西
を撰と云南北を撰とりて東西の短る
南北より四十歩云く
よま死を多撰て多けなくと云す

ふ出母塚母を令せして以上八母と云
多ふふらぬ花を牡丹の姿りま

公石曰まらるの花をトよりあきく林を
の花をトよりあきく是皆陽気のちる
尤らるまらる又格別なり牡丹の大海下
より咲のあきとよりまらるまらるあきく
をりつ

考案のあら人まらるまらる

愚考名義集ふ日決定審判謂く智造
心分別謂之也也そのまらるまらるをりま
まらる

并のまらるまらる

一書小日淺くし書教りや教く清し
しま 愚考淺囊抄曰於梁縣有小山

山上有水清淺其中生紫竹林和詩の
疎影横斜水清淺又楚辭曰石澗兮
清兮飛龍兮翩々此依例をえてまらる
一やまらる清く清くまらる

竹の子の力を得ふまらるまらる

哉美曰豊國の神を方度ちの境内あり
大肉考まらるまらる覆醬集ふ大山歌
豊國神帝壁云零々東山古唐郭
蒼苔蔓草上 題 牆 英 美 花 散 無
巫祝秋月春風 依 主 張

竹の子や 畠 隣 お 愚 太 郎

愚考 愚考 愚考 愚考 愚考 愚考 愚考 愚考
おた 神 月 と し り ま ぬ 一 應 仁 心 翁 未
任 友 ち め い の ち を ち 神 次 席 一 取 と

庭さつふそのりりんとくとして通曉すり
やういふる依りるり吉妙なり 一書よふ云
の田植秋を昔生仏と云盲法師の依りて
人よふをいへりいと 愚考善好の云渡を
持院の浄字 悟遠花月形もいふる平家
つりてを依りて生仏といふ盲目よふを
てりて世々の新皇を吹徳院の依りて
後系宗形の見りて詩才あり晩年比
叡山よ依りて時代いへり有る心注の是非を
とく

眉拂を面敷いりておのり花

一書よふ眉をさするる子れ名依りよるを
しといふ薊の種ありりいふをさする
人の粧具よして大女寄小女寄るるといふ

此花の歌よいふるいふのたろてさの面敷
よるいふをいへり一徳よる上をいふ花の産
物多きいふは依りり近代産物角力合ふ
大岡寛上のお花とあり

法隆寺の因帳南宮の太子

浄袴のばり建る花の太子

愚考推古天皇十五年龍田の祓の教ふ
よりて聖徳太子の草薙あり太子二歳
の時二月十五日東方よむいひて身は
と唱へありいふの内よ新迹の左眼あり
しといふや 毎日午刻七時許にておれをい
ふの守と紫式部南宮の舍利をいへる
七の薙おりいふをいへる双調又黒字
紙入曰或年大和の法隆寺よ因帳あり

この次子子の冠をいん後しつるこを後
の因幡よまのし超ましつるのこを不代
のこよふ心をさるまのましつるの心のわとれ
まのこよふ

宗徳やあまのりさきたけりの花

愚考百念をゆをよるこらふまをまのこ
まのこよふの花よらうこらふ

よやまのこまのこの子の母も母の咲む

成美曰万まよふ山上曉良おらら筆を分
をまのこらうまのこらうまの母も我を万
はらむのまよふのこ

みしつ夜をまぬら冠をよまのこ

愚考二徳院のた金賣吉次末春とりよ
りのたの翼列よりのまのこ

つるまをまのこ

下園や地味をらうの母のまのこ

愚考海衛日地蠶化版縮折脊出而る
母のまののまのこ下園をまのこ
蟬よるまのこまのこ
出すまのこ

舟引のまのこ

一書よまのこ
まのこ

日のまのこ

漁村云山城園宇治那系と大津のら一里堀
の西の筋るら

まのこ

愚考竹を六十年まのこ

主竹則枯りし有りけるをそ違ふハあら
て言さ三宮人をも恨りて叢生すり非有り
維をそまじりて石原畑畔ありふら小竹
有り決りて大竹の十年枯れしをそまじり
夕々事や岬をみりしるるの暮
愚考岬を眺山と雲の暮の言く低く
立ちひきりしを元山の形よるるしりし
終夜林をきくや 裏れや
一書ふ如雲の全昌寺を大層ちの城外に
有禪有り有り良をそ夜公解ふ別ま
ては寺ふ家しりし吟く聖日翁のまの
寺ふ止宿ありしりし

又月や六月の夜ふ八似ん

愚考 埃囊抄曰 清文章を依りて 夜庭ふ

晒すゆへに文月とりよ古今 俳諧 歌六首の
夜の歌よていほしりし心をもそ
し物も帯て阿方の川原をそまじりし
祖翁もそをそをそ吟る有り 近路の白粉
目のまのよりまのしりし川をそ一をふ
まのしりし 此境をそまじりし 依りし
る 終り

合歌の本の暮秋もいし星の歌

一書ふ曰 朝後拾遺 集ふ云 七夕の夜も
うらみまじりし一夜のうらみまじりし
らむ合歌をいししりし 夕の夜も
あみそ 眠ふりしりし 俗語な
の本もいしりし 心よるる

を任職し本山上人を隠居する
二世上人他阿まより代々他阿上人と
号す一世上人気比の明神よ泥濘を
あふるを令社改小砂をまあるより
代々の例とす系譜の案を門の介を
本履をとるき一持行の持多のし砂
石をあふるり利きとす気比又八首飯
仲衰を皇行宮の海よりて則帝の
美をとあふる尚國の一宮あり舊事紀よ曰
二月幸角鹿則興行宮而後之是謂
首飯宮

このうらふ夜の月をえりて
一書よ祖徠曰我子を甥のりて信正
とくあふる人の公卿の子をよるるを云

を養ふ叶ふやうなるまよる
愚考礼檀弓よ足牙の子を我子とあふるや
あやあひてきこうをよる
成美曰和漢三才系言曰鱧^カ鱧^カ魚^カ形色似
粘而口^カ洞其尾有小岐有^カ声如蛙鳴人
捕之良声也曰五紀^カ又似曰岐^カ雀氏
食経鱧音客和名曰知^カ加布里以鱧
而有黑点也公石曰きこうを俗よ蜂魚
とりよ鱧サツリ我信濃よりてきこうと
りよ此魚鱧よ似て針ありとくは至て痛
はより鱧をとるるとしてあやまらるる
きこうをまよるるをよるるをよるる
りよるるをよるる一つの附きあり享保
中積ヶ股洪水の後受ふきこうあり

そら後穂のせりる花をまきしとあり又
寛政の末よりきこらうありそらめといふ
傍正の妹の小室れきこらう
一書ふ云彼花山傍正のう花つとそめ
のとしよ并てたつりまふも心小室のきこらうと
まこらえまらり

一戸や夜もやうき 詔 定

愚考一戸を南朝飲よそ盛景より十五里
かと下るり牧を花牧尾 設 菟野等
まゆ甲斐の御後よみらのくの約連二十三日
とりへ凡二百里の行程をまは夜もやうき
とらうい

田舎間の考縁さうし 葉の宿

愚考田舎間を五尺八寸重の厚を一寸

六分京間を六尺三寸厚を一寸七分二厘
門端方六尺六寸厚を一寸八分毫を高く
野間とよりし吉野よりくも用ふとらう
葉中七尺厚を二寸各横を必まの事あり

毛吹のれりらうし 花のぬき

成美曰古今集きのよまて早苗とらうい
いはこのすふ稲美をよきて林ゆのう

神田のふ

花すき大倉をたはらうい

愚考花は是の秋のるすり拾遺集ふおはる
しそやうるをまらう人の子を古を并て
やうそのまのまいしるのこらうい
ひるいふりし皆田舎の詞をまらうい
成美曰神田明神祭神大己貴命をたはらう

人皇四十五代 聖武天皇 天平二年庚午鎮座延文年間有故合系平将門
灵云 愚考北系五代記曰熊系といふ
るも神田の神も限りとるも本祀宣と云
我朝も熊の始るも地神五代天照神
の天の岩戸も入るも一町八百系神集り
て観念の一神楽祝を奏し多し
以承之也よよて熊式之靈といふも生為
足翁大主も天照太神十歳曆を春日の
神三歳申雅久も住吉の神もして
あす是等神代の事あり又從宣小
我氏子といふ所も系祈禱をるも
熊の舞樂も志らんと有りよの毎年九月
十五日神る能ありと云く物りよ上松家と

小桑家の合戦もよて大永四年神る能
おろりよりを例して隔年の系礼
ありて今よそのめ系八幡も暮松
りも舞楽能の考あり此人に戸下
もして居住し之年一度の神事能
を片も今よ今よおろりりりり
もして白のさる法候方より系礼の誓
固を仕りり列を花芒といふる
立歩り秋の夕や燈不る
成美曰病深海曰風瘴疹一名癰腫人皮
膚虚乃風寒所折則起也和名加佐保
路之
塩魚の萬もさるもや林の嘗
一書もさるもさるもさるも

梅咲て人の怒の悔あり
芝山曰梅苑悟入師之柔和慈辱心より
てりし怒の悔をばりし

梅の息や山路隈入る犬の去似

一書よ高岳よ入人犬のめしとりつ子
洞をぬて高岳を梅の多ふと 愚考

蘇子瞻の詩よ上畧山人醉後鉄冠落

溪女笑時銀擗低我來觀政回風信

皆云吠犬足生鼈但恐此翁一旦捨此

去長使山人索莫溪女啼此溪女を

上獲入比倫し梅の多ふよ此をえ

し候るるし梅の多ふよ此をえ

撰骨の白法るるり必定せり
梅の多ふや入る黒牛の角

成美曰碧巖之隔墻見角使知其牛

初晴や岩るるし梅の多ふ

一書よ八重梅の枝を考ら梅の多ふ

あり梅の本意とすり変る法苑よ先

らして瘦てさうくいし梅の多ふ

きそのきし妙よをりし梅の多ふ

くそのきし妙よをりし梅の多ふ

花の多ふをりし梅の多ふ

西子良子の一りし梅の花

一書よ信よれらることし太神宮の神

儼よを仕すり小女るり伊勢神宮の

子良物忌と称すり社家二十八家ありて

その暇をりて神籬をりて梅の多ふ

一書よ梅の本 希きまはゆりしとすを
らゆり梅を 法浄潔白るり花をれと
梅をよめてか婦貞女よ比すりり待れ
るるよよよくあつるあり 成美曰坂士伝
太非玄系詣の記よ云子良として知推
のをとめのいすこ夫婦のわらうもあつる
るは膳を梅よふ意用よて石住り平と
非よよるるのめまは二十三十まても月
事るるー冥監よそふきめりまは十一二も
もせりりさるるまは別職とて辞す
入相の梅よるるのめあひきり
成美曰暗香浮動月黄昏とる梅の
あつるりりて林和靖の句るりさるる
あつるるるの梅よむすいしるる

蘇くろしき窓の細目や雪の梅

才雅曰ひとりあつる子のまらるるのうはり
あつる根の梅の自あるりるりは古歌よ
よりのまや

百八のうねてまらるるや雪のうめ

吟歌曰百八の障の数も法行を光を生
滅法生滅滅已寂滅を樂法は白の文
をるる夜更夜よまて一夜よ二十七完
撞とり別首八煩悩を滅ちむあつるの
数るり 愚念思よよ百八のうめ
窮りよあつるそののわらけのうはよ
赤染の障の家集よ障障の侍をて
よめら後の号をうねてるらあつる
るるるるあつるのあよ入まやあつる

独寐もよき宿とらむはつ子日
愚考民家宜忌諫よ曰正月を独寐と
いむ月有りひとりの集まらば必不祥を招く
もの有りといふ止るを好まざるハ休養と
床よ蓋ておしる有りさるハその一
神子日とあるはよき宿とらむと思つる
るも又五雜俎よ曰止月上ノ子日
るまハを年丙子るまハ早 戊子るまハ
蝗虫庚子るまハ叛壬子るまハ水ノ
詩よきキ一末ぬ夜とらむハ穢
愚考空也の遺身神鼓を 兼中五雨の
三昧場を夜行す末ぬ夜を 兼氣ふ
るまハ抄不るるなり
うらやうーたをい切會猫の意

去来抄曰翁の曰心よ俗情ありものひと
ふい口よ出れといふるなりーうまう終種
是よ即りて本懐をあらはせり是より先小
然人々急は方よ言く人のめをけやす白
多し是れ是れとままふいりてーめ
本懐をあらはすなり 愚評猿蓑ハ
祖翁の精撰ありて是れも七部の内
一のりも花実全うして序ふさ一自
筆よ書まひて吟味をそりーもの
集るるふらる悪評の白を入り
一寺い謂るー去来抄の梅いー覚
りー猫よけ白本紙を定家卿の
引らやうー世をま志のりー猫の
妻ふいさるー春の夕ら祖翁紙人

を斬りありて則 定家卿をあたるといふ
うみありありい や定家卿のそまふ
ありと陳するれ 乞則模写交態の
台法ありて始と終と態を交り
くありありて意味ありありの法あり
ふん心人去来おの著言ふありあり
るありて 蘇曰もあてありあり
る情の本体をよく見ぬいてうら
用換あり後令い他のるを参り
用心しておめよ 軽するありあり
ありありあり

いとけいふのいとおそふと虚本を
愚考の虚本を枯木とてありあり
芽の出てありありてありあり

のけいふや柴胡の糸のうす 景
一書よ云一本よ柴胡の糸と書くありあり
非ありあり柴胡を糸のうすありあり
糸拵よ新引の糸を拵り 独活
愚考の本草曰得風不揺 无風自動故
一名曰独揺 炒糸ゆふの糸目を焼く
るありありありありありありあり
白く美ありありありありありあり
城のありあり一夜ありありありあり
古連曰ぎがを葱の花ありありありあり
をありありあり一夜ありありありあり
董子小端洗ひてありありありあり
愚考の董を皆亡祿ふのありありありあり

成美曰江談抄曰去實保部都を辭
すり時きつ國を山水きより一とた不
き若う初るすすひちまて建り足

氣とも其の夜何連そ花朝

愚考朝を和名抄よ由波 祚代卷曰
天照大神脊よ十箭の朝五百箭の
朝を肩と云く武用年略よ曰空徳を
矢を盛物なり空といひのし種を射
つり 埃囊抄よ曰捕正成り製すり字よ
宗と書片うろををさゆくつろり又うろ不
の文字廿四通書方あり云ありは略す
大考や古考の美の花の早

愚考花も美ありとやは強書の心を
えりしちん麓くろりあをさるめて花も

美ありみより一野の山をさるめらりあり

乃灌や花をも代を幾りか

一書よ曰乃灌を太田持資入道源頼政
之裔文武の才士なり文四十八年源頼朝
て討死す年四十二やよる名あり建り
愚考乃灌を判製の号なり和歌八集
亦三十六歌仙の一人よて世人名り所と
標于よ夜らる花の立すり

愚考宋書曰宋の武帝の女壽陽公主
人日含章簷下よ階梅花公主の額の
上よ着つ五出の花を成す是を拂へ
とて去らん自後して梅花粧あり
源氏の族をえりて立姿と伝るを蘇
姿の模字あり一

公石曰言の石よるりしるるを概ふ
案し生食を摺墨ふたふましるるを
可るしひの波國勝浦に死して石と成
しし此るる義仲をさくせそおめし
とるるししとるししとるししとるしし
しし義仲公元暦元年正月廿一日粟津
しし石田為久是を討

新書をあふみの人とをいみたり
先注し曰尚白り新し道江を丹波し
新書をり年しあるししとりしし
ししいりけりけりや去来曰尚白り新
しし水腫腫としして書成を
しし使ありしし先師曰古人も此國の
書ををさするるししし

愚考尚白もさするの遠人さや
身毒をりししあるししあるしし
著言を許るうけひりむや書ふりし
とるしし新書り夫本集し未踏も
しし強はんしむるしししし
ししてよあるる古今しあるしし
林入るしし肥後の隈本能宅の七屋の
小兒もさるるしし書るるしし
説と謂らるるしし一書し澹齋云
しし先達の説を挙らるるしし
しし連款しし上しし
しし抱字しし必しし

考の根を刷ぬるの志なき
一考の根を刷ぬるの志なき
古往よ曰は服を不白の羞をいりあつる
有りといふに涼徳曰考の根を刷よと
はらふ一きく白ありといふ
考の根を刷ぬるの志なき
をいといふに他考よよもて考の根を
の敷いつれも辱をいといひて考よすむ
その考の根をいひはらふ大切よ刷よと
忘らふ考の時なきをいといひて刷よとい
一八余の考を自悔と白の中よよも
て考の根を刷ぬるの志なき
考の根を刷ぬるの志なき
考の根を刷ぬるの志なき

何れもなきの志なきのりちるを
里の心なきをめて午の貝く
一書よ大考よ入山伏の午の日よ柴
灯とりよ新の法ありなきの
ハ里よ入初てとを附
てとも量販の志なきを吹るの
と午の貝あり
貝ありを吹るの志なき
つきぬる
愚考の目録上人金峯山
具の形なき赤條橋つ内極あり千載集よ
芙蓉の花のほら
一書よ此芙蓉を蓮る人

いづれ蓮の葉にまきつるせうり

吸物にて先出其をまきつるすいせむ

一書し小肥後玉水善寺より水泉池清あり
言ふふるり

此書も盧同の男吾なり

一書し小唐の詩人よりて葉紙を書き

人より盧全の名をいりりゆりのよて葉人の
隠者といえ

儂をよりり 車ひき 六む

古住より日夕秋の宿の侍るり 成美曰

源氏夕秋の巻よよきをを並やとて

侍りていとよむむるわさるるやりの

何やめ見えくわくつき人侍りぬわ
りるの連とらうこのやき大政よあたら

おとくしあしてとてうく出のりヤ 六き入
了のりま

柴の戸や蕎麦ぬするまて歌をよむ

風谷曰古今著聞集よ云 滝直信於坊

のころありる家の畠よはをう急て

侍りて或夜盗人の皆引て元よりり

とゆてよあり歌ぬ守人を長袴たや

あつらむそをたとりてそをういひさ

りるらるの以大盗人よ袴 赤保暲と

りよりのあつらむゆつよを袴とるよ

るむ

るらるの雲のすの赤き

一書し踏鞠のきりを雲といえて夫
を赤きと虚よ後よりるりといふ

愚考のきやうなる心はうききるよて
る多良山の雪のあきとを旅衣
してまゝる白るりあきとりのみ字小目
をせし一次の白るりその旅衣の場を
定めて靴作ると傳はり

石心のあきるる花のたすむ付

一書よか最在赤門ま氏森心してま前萱
石心とり入酒宴のおくく盃の中一は不みの
花のあきるるをえてて血をを替りてを候へ

魚の骨をわらうまその志をえて

物人入し 曲門の 信

立りの髪髪をまふ寸女ふとま

陽あま竹の美子はしき

古住小日釣人の道しき世のまの候

古住の早六

るくく云く 又古住小日浪化云今人の候
借よお強等をとりのりいり 去来日記
るくく巻一巻よ一二百なり不し
舟の中よ待人入し 小正門の隠も口
の翁るりは集機よあまのくりあ
白ふしとして 糍結よの白を候り
入りたり云く 成美曰深氏末摘花の巻
不強の何候りあははね生し連ハ勢
のいしひ舟しきそりてきりる

愚考古往先住とも物人入し 小正

門の強味し白ふあて 解手を候り
の候よあきるあきりの候は白ふよ
ふりて候るまのま云あいなむ人
まうまといえま入車いほくま門を

古往小日西行の能因の人の僧と
言えり 一書よ味子房の主を徒よ信
蒼をばらうまの月をすまう 蒼更心
とむきはく人の末のをいとも中略因
西行の徒をむむ 蒼の僧西行の心
引く 彼法所 一筆 何の言ふい
そりりたるおろ 於こそ撰集の言と出
思ふ子細もあまハ命のうまうき
あのをりいと 旅 僧の 途申すて
出らば 一の 熱 子 中 小 筆 してき
こえ 侍 推 参 師 中 小 筆 愚者
成 不 と 強 兼 の 僧 言 何 小 比 無 小
あそ 又 抄 書 西 行 の 能 因 の 人
ぬり 去 来 自 分 の 言 何 の 人

の侍と言えぬといふ鴨之沢の秋小
舟て吾妻よりの梅葉の思ひ立あり
おさるるなる 同く 小書
う一ふ 何の言ふ 西行上人
言 遊 山 小 抄 一 冊 後 成 郷 千 載 集 を
えらふ 入と 言て 年 何 小 筆 撰 集 を
歌と 書 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何
其の 葉 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何
君 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何
何 何 何 何 何 何 何 何 何 何
入 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何
何 何 何 何 何 何 何 何 何 何
何 何 何 何 何 何 何 何 何 何
撰 集 の 二 字 を 撰 集 何 何 何 何

露のやうなるたる方のまののすといひの心
ふれて西急と稱するなり吹のる末の
砥堂もやえくら修あり 愚考法ゆを
うりといひふ無考を疑ひてある花の
親志なり西行上人を尊称院上北面文
武の達人俗名 法といひ世路をまを
年考を悟り保延三年八月家出して北山
西急のゆとよて刺髪時ふ年二十と云
西急寺も行基の開基今も専念の僧志
是を考り西急寺ふまし時とめころ 梅
さうりあり無考ふうときも人をあふまを
よ事茶臼法ゆはうるとあるを八月は
八月小白雲の差あり花とある年二十
三西急らありもあてとを西急の衣俵

をうふむの美さ色ハ西行 なるる眼
あり本号の砥堂ふまもくは法くしと
西行の寂をさす貝原本号路の記ふ
曰大井大久年のる西行の墓あり西行
坂といふ砥堂を一白の合とよて本
号をいむむとめの 梅 椽なり西急を
法然上人の弟子ありて何を附白の
まといとちする西急の名を母上とい
うむといふありものをこのくをまをく
住者の心いふ是朱 あり西急の名書
藉ふありまをくもくも七八くありぬ
砥堂のるる成美曰下学集飲食門
藪スイクキ砥堂もま菜ふ後砥をく
まへて二十日とぬる寸納足のまをく

白み引てぬをり出つを飯の上みそ
喰ふ末尋後島の松く山嶽山のまよ
するもなかり方俗スニキと唱ふすい
を女部花中の珍砂石集も出さ

何抄ひし子 旅の 帆く

夕月夜島の萱根の取願すり

人志事し一春その水の

愚多乃思ひ暮る八雲水抄不露子を
ゆい進歌匠撰集も唐古よて二人の
女を埋し墓よりせしる子をいふ又
磯原あまの原の忘き子とよみし
をみちるし又よむしをり
系撰版一もいよ味ふり
まま三月何け不れ、

古往不花を極不何し又極ふを
ゆい何し極をゆて花とするを撰集
よ一白ゆりし多し初心の字あけりぬ
なりと云ふ 一書不此句の花を
名人の業あがりし今時只去感
のあて花をゆせこの又翠白の曙て花
不城のと終しいるをゆて花りなり
さやしるるる何し先師秘花のり
愚考息丹撰云不日花を極花といふ
てま一白花ふを何しす 一書
不及ま何し何をきして花と云ひ
たりやとほく花水入しるよふくと云
過年極をゆて花すするり不
やよふんはて花をいし

半花仙の花をさく梅よすりの歌を仙居
門の癖を又花を掃く一志不き一族を
希代の花より多罪のよはりなり一志に
花仙の花二つをうらむ花をすりの歌既
小咲花を百款よ一々所より又花を表
ふ引よるよ子細年一の表三の表各の
表よすりの歌を縁手法身なり初表小
花をすりの歌一余美なくを分三すて
よす一白白めより下へ出すを古今小
例なき梅を縁やをさくを近年五白め
七白めなき小花をすりの歌ゆへを古今未
多旨の法外く又花仙よ花三本出せ
しるすを西花よりとさる故なる一
二花三月を定法をすりては徳の香あり

花よ成すの小心の法を女ゆすりや花三
本見ゆりよりし者一を不覚惚の金
るり月花を一者の的跡小花をすりて
大切のものゆへ小名残の花よ香を
をすりてをすりて忘るるすりて思案
をすりて考ふ一竹小曰花の香を
よすりて花は花梅梅をすりて梅は
すりて心以大切のりや梅ハ一字花散
の香ありと梅の花よすりて梅ハすりて
花の歌よ梅をすりて古今の法令と更玉
刺祖氣の金云の法とすりて自己小梅
梅をすりて梅をすりて梅をすりて梅を
梅よすりて梅をすりて梅をすりて梅を

一書小治るるを所謂之也切るる梅小
葉の色をまじりて東海を吹送一口小
さのくしーの感嘆少なり云々

成美曰三才易名曰奇云稷園子之類
古者祭多用黍稷今則以糯糈食又加名
抄糈之度政祭糈也又字治接遠少云
考くまをせまをて一とくまをてれハ
愚考神を名目致糈抄曰糈米を蒸し
て餅卵のめくおしをせして庁本よ盛て神祭
よ備へ

糈の葉延のらりるのきく
愚考糈のなと糈の白とる丸白葉の
る葉のいとしてままなるり

露心のほりぬみ越り 於鹿山
内義政ちと呼聲 ちん

古往皆曰西形の侍と寸去来文よ曰
此のまの西形をみりぬよせらるるよ
て小又西形於鹿山を越り時於鹿山
うき世をよそよみつり抄ていふるり
ゆく身育るる心

愚考此又体更
よ心ぬりこー箱の白をさーて我るの
ぬくまのーらるる合うまーきの白の
携程とあちうあちうたーてん一き文
侍るり又世上の説よる内義政とを
虚名るり只く世をの侍とてんて
くよー人を定るる悪ーと云くいふれ
ハろく抄習の海るるの侍をの侍

えをさめてさすぬれ納めあふとてさ
ものころりたるをさすぬれ納めあふとてさ
橋をさすぬれ納めあふとてさ
はよさすぬれ納めあふとてさ
成美曰 史本集曰 予そのまらりてあそ
すし小倉より山の志げみおたのこころ
伊豆の海はさすぬれ納めあふとてさ
愚のろ 籠籠 玄海 遊志とを内海とてさ
又瀬戸内とてさすぬれ納めあふとてさ
てお海とてさすぬれ納めあふとてさ
干空りありとてさすぬれ納めあふとてさ
お海とてさすぬれ納めあふとてさ
わらわらとてさすぬれ納めあふとてさ

大膽よおのりてさすぬれ納めあふとてさ
公石曰 伊勢物語曰 陸奥の女をとりてさ
ひ一夜らりてさすぬれ納めあふとてさ
女は 刺すおのりてさすぬれ納めあふとてさ
りげのやとてさすぬれ納めあふとてさ
小刀の拾ぬるり 細工とてさ
成美曰 織人を刺す合よのし中りてさ
さすぬれ納めあふとてさ
さすぬれ納めあふとてさ
一跡曰 ちとてさすぬれ納めあふとてさ
愚考 小工面の心ちりてさすぬれ納めあふとてさ
らぬら 等皆さすぬれ納めあふとてさ

幻住菴記芭蕉州

一書小祖菴幻住菴の文多三通あり始
の一通を後抄舎小智中の一書を賦之流の
一通を後集集よ出

石山の奥岩岡のうしうしありふ山
あり國分山とりよそのこみふ事

右の名を傳ふある一

愚考江別栗太初渡田より石山を
舟あり行る一里計幻住菴を
を養仲寺の境内より行る舟あり
え正天皇養老五年勅命より
必よ建らる初基を造り夫六親
の像を二造らる

麓ふ細き流をわたりて

翠微小堂なる三曲二百歩

りして八幡をまじせり

一書小翠微を山の半腹あり 成美曰

杜牧詩与客携壺上翠微雨後曰山

未及頂上在旁坡陀之趣名翠微か

しこ小八幡の小社あり侍小推の末

あり昔のよやとゆ一書ふ山の

形の美あり小翠微とり

非体なる殊院の寺像とてや

唯一の家あり甚忌とありを

雨初光を和らげ利益の

塵を曰一う志あり

き

愚考殊院を修灯録曰性情尸如父之

各月上母之各殊勝妙歌云々、西部大寺地
弥陀垂跡應神天皇也和共光同共
塵界して和光同塵といふ

日次其人の指さるる事ハいふ
神さるりの志のりるる傍小住
すてり子の子の戸ありのりる根毎
新をさるる并るるなりり警
て狐狸婦とをぬるり紅住
房と云ふありの傍あり
曾士菱沼氏曲水子の伯父小
る心持りしを今も八年計
むりしるるりて西よ紅住老人
の志をの并のりる
一書よ菱沼氏曲翠通林外記 一書小紅住

志人志勝所薩中本多八希左衛門六
十余歳りり辛寸探山居士

中又希中をさるる十年計
ありて五十年やちるる身

成美曰付よ祖孫曰十七文拙者二年

義勇の并のをさるる恒年の家
をさるる事

秋亭曰古歌二首并の虫の并のや失るる
百の夜を父よ母よと吟ありり
すて心をさるる恒年
らぬ事

奥州系傳の畧き日小面を
あつるするるちゆみ
きゆの荒磯よきいすを

中よりて

を味坐曰能因法師 志るさうれ波の
うねしはさういふてあゆみなりしき
出しのき淡 一説小異相象深の異
き日とるはくく負 松島 志深とるけ
おはるぬを孝志のあややちらるる心
と云く 愚考松竹を五月の初より
象深を六月の末より初を松島象深
の異き日とたけけあふもや奥列出
相象深北海と一説しふきさみさる
りのさる又奥相まきさくこと伊能の
拍子ふりりて又孝志の志り感す一
一 詳小異相象深の志り感す一
細名と歌ちりさるる志り一 一 奥相

六十一

松竹象深とる 志深の志り感す一
是より幻住庵の始末を述るふ
今歳 秋氷のるすすまきよま
雪の深草の流まきとくあるま
草のむく本の陰ぬのり
新婦 淡きあくくめ 祖根信深
とくくて卯月のはくくめいと
くろそめふ入く山めやうてい
一とさういふるるす
一書小ま本集くくさきやふかしのうす
のいりりてさすくわらさんさのむ
らむ又山家集よりくやるをなして出
とゆりふ身を花らりるるもと人やま
らむ 愚考 志深抄小時めくき集

る流まのぬのの草んをここの中ちきよせ
て果らん入る入るとまてつるをま及集と
りい箱のまといの皆流りやるよはく
まのりまて知りぬへ

お方の小まの名残もをうり
はくし一嘆のそり山家松よくけそ
時を忘るしあがり程宿りしを
の流りまのありを本流まの流りく

一書小支考文探西形の流り全久を失す
後信久選小宿りしをまを燕るなりと
愚考平ぬま終流の流りお終小製りの流
小製るましと終小中りまや終并らり
費りしをとりりしとまをまむとまは

りしを小宿の字を冠りまてり計あり
一のや又曰本流りまを守屋の流りま
ありて太子の流りあり寺を流りま
ありしよま寺流りまといりあり
魂吳楚東南よま
一書小杜子美岳陽樓小登りり昔聞
洞庭水舟上岳陽樓吳楚東南圻
乾坤日夜流

守ま瀟湘洞庭あり

成美曰山谷詩小惠宗烟雨歸厚坐
我瀟湘洞庭欲喚篇舟飯去故人
是丹青 愚考惠宗う若厚の名画
見とまの舟を呼りしハ朋友のま
画ありとりま警り詩あり湖氷東

南ふ流まきさるふ心を籠しおのろく
身をよめいさむししを眺守方う引うけ
らまはしめらるるあし

ふら未申まをららら人家
よのきかたふ満より南葉峰

よりのおろし

一書ふ家語ふ曰南風之葉言可解吾
民之愠兮 愚考熏風復のゆるるのと
事文続集一のえげ又呂氏春秋曰東南
のゆるるり

山吹海を浸して凍し日枝の
山比良の言根より唐傍の松
をうすみおめて城あり橋有
泊るるふあり室免ふらふ

本樵のふえ

一書ふ山中に事樵唱有世守の侍と
愚考或りのふ曰本樵の序を本樵の唄
をいふときまは此をうまのいふを
あし樵吏の唄なりと知ら
藤の小田ふ早苗とる秋を
形りふ文周のたふ水鏡の
きくき美系物とて
ふらふといふ事なり申ふ
三上山ま士峰の侍うらふて
武義のたふき 柵もたふ
出らふ

愚考三上山とら置士十名の一ツふ
て蜈蚣山といふ士峰十名の

佐々後山集

一書小山谷集徐老海棠菓上三翁
主簿峰庵注云云徐佐樂道隱於
藥肆中家有海棠數株結其上時
与客菓飲其間又王右人各得四方
歸結屋於主簿卷上嘗有毛人一至
其間向道愚考主簿嘗与書名
非有主簿名官名有りの同の書名
ありて江西の廬陵郡よりあり木客
多とりて法をいふふあり脈の下の
白毛を帯りてを主簿とて記す
の危形小仙とて主簿とて記す
りてありてを主簿とて記す
山よりありて

唯睡癖 山民と成て

一書小癖史曰李叢老睡里を好み
多人と云ふすり小食強て博棋を下す
叢老を輒枕小法きて眠ふ其の數
局終る時一度展轉して云我始て
一局あり公等幾局そとり
愚考冷齋夜話曰范堯夫小睡眠の詩
あり五雅俎曰睡を嗜む者あり邊老先
杜牧甚多數人皆有此癖近世張東海
有睡亟記又陸放翁睡癖の詩あり
まは并をさすとりありあり
展教ふ是をさけ出
一書小展教山の言き教之 芝山曰
王子瑞待小門前剥啄定佳客簷外

扇影 皆好山 一書小東坡 振衣步屐

空山入風を叩て聲守

一書小石林 詩話曰青山 拍風坐黃鳥

獲書 眠る山 閑寂のきりぎりす

一書小玉荆 公竹 拍風對青山 獲書

眠北園

そよ風の心すめらるる時を谷

の清き水を汲てみ流るる

炊くところの木の葉を焼て

一書小西郊 上人とくらしと 妙法

出方の苔 清き水 弁ふすふと ともなき

すきみりる 成美曰山家集 家集 小

天の六十五

よるええの或曰小幡宗甫の歌

らむむうに住む人の 結ぶ

心きく住む人 結ぶと 結ぶ

結ぶりのすきみりる 結ぶ

るを満て 夜のりのをさむ

るすきとところろろといさく

はらりさるるを 結ぶるる山

の僧正も加養の甲斐あり

表子もてはさむ 結ぶるる

いりりりるるを 結ぶるる

て 額ををいといと やすし

をそとて 幼住者の三字を送

らるる 幼て 孝養の記念とす

一書 加養の甲斐あり

加養親定

菴本甲斐守敦重と号す菴安寛
永の間の能書なり菴子来祥号
稱していりや 愚考素白特大及
是文康之教父云々 又菴表と号云
菴よりイツクニあり

まをるて山名とつゝの藤原と
云さる器あくちりいへるなり
本曾の懐筆之越の菴の素斗
枕の上の柱ふらげりりるる
しとていへり人ふ心を動し
つるる書書の菴里のたのこ共
入るりてるのたの縮こむり
し一糸の夏細いものいりり
秀字あつめ農後日玩小山

の得ふこと

一書小雲谷雅詠来晦菴野人載酒
来農秋日已夕 右古文菴集より
夜坐静小月を侍てハ款
を侍てハ款を免てる同所ハ
是非をさるる

一書小夜坐不厭湖上月 一書小莊子
并物悔日同所同系曰曩子外今子止
曩子坐今子起莊子曰義曰同所
彰邊之 終落者此時是非待彼之
喻也

一のくりえとていへる小用
菴をぬみ山登小跡をの
くさむとよめる

病氣人ふ倦で世をいと云
し人ふ似たり情年月の
う世りあし拙き身の科を
おりふふあつて仕友を命
の能をうらやみ

一書ふ翁徳者堂家同苗仁古島門友の家
長杉庵基士師と云陪徳の小身る事六
官身をうらやみありおむ一うらうら
てふを佛額祖室の庵ふ入
らむとせしむふくくくくく
ゆ雪ふ身をともめ荒るる
を骨して裂くは涯のくりり
あくくくくくくくくくく
才入りてはひくくくくく

意味堂曰惠能禪師 吾三十而窺佛
籙祖室 一書ふ曰佛頂禪師子冬
して様も少くく学びたりと夫
をも余ふりく終ふ者あのみとて
紀傳の一をうらふはなうりて生涯を
終るうらうり

樂天五腕の袂をさうり
老社を瘦しり
一書ふえ模寄 樂天信ふ老達佳
潤帳 兩地 各傷を限袂
成美曰小夜の康覺ふ云良基云樂天
といふ一人を教たりを信らり
らきあつてふ心をくくくく
よりあつてふ心と待りあつて

くしき 竹のり 一書小李の白駒 杜甫
版 嶺山頭 達 杜甫 頌 戴笠子 日卓
牛 為 同 錄 何 太 瘦 生 只 為 從 前 依
待 苦

賢愚文雙のむと一しうらさる
ものたすこと幻の柳をうらや
と記のたすこと

一書小海神 注曰 謂 互 尚 忠 尚 尚
雙 周 尚 文

先このむむ教の本もさるな本を

一書小源氏推り本の巻ふいりさる本の
むとをさるさるのむと一く推しむとす
ていし人さるけさるのむと一さるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさる

さるさる

てふとけの年をさるさるのむと一さるさる
むとさるさるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさる
いをもとけさるとさるさるさるさるさる
さるさるとさるさるさるさるさるさるさる
うげとさるさるさるさるさるさるさるさる
とこふさるさるさるさるさるさるさるさる
しき信とさるさるさるさるさるさるさる
のむとさるさるさるさるさるさるさるさる
政の推をさるさるさるさるさるさるさる
非さるさる

おのりさるさるさるさるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさるさるさる
よりのさるさるさるさるさるさるさるさる

所々心入りと興々々々又小説小日鄭
度好書苦無紙て意息ち持の筆を
贈へて是も小書て樂しむ傍も亦似
たり 愚考家隆卿云の筆を考の
るも一人書けりつがみおらまはる
やうに思ふは是も小書けりてをり

歌や葎の中丹の花うつき

愚考白氏文集葎室中有美人常
織絹罽錦市又字苑小日歌八眉る
のるるりカホバセト訓す

あつしし一孝ふ十歌も五月書

愚考源氏もあつしし一タトルるり
句入書曰蹴躡るり字彙曰緩歩の形る
膳亦米や早苗のつけふ夕涼

愚考山王交礼の供御を思守少急小膳不
淡といふ世に切つを連をせ、とよこなるりや
一あつしし一孝ふ十歌も五月書

愚考之るる大坂の人山城のきり御田の
麦粉を古産とすりのるる土産を我
玉の産物をとるすす一孝ふ十歌も五月書
よはの玉のるるあつしし一孝ふ十歌も五月書
とらふよあつしし一孝ふ十歌も五月書
玉をとりもるるあつしし一孝ふ十歌も五月書
あつしし一孝ふ十歌も五月書
賞給てとらふあつしし一孝ふ十歌も五月書
の御膳は新よあつしし一孝ふ十歌も五月書
あつしし一孝ふ十歌も五月書

一なる入山王交礼の供御を思守少急小膳不

愚考 歌氏要覽曰 信家四月の寺
 を以て結衣とて 安右九十月七月
 尾を以て解衣とす なるたりの旅
 床すきも九十月に於るる山ふ善く
 おもすむと書音ふやまへ
 女立や梅の臭の一とす
 愚考の力サる良香なり 盤と書一
 志のりるうとて 法をるつを盤と
 四年 蘇生 初日 唐
 言るやあも果にたのつ并
 愚考 住持とて 宿をためて思
 心を ありき 宿をためて思
 年 宿の宿はるる 四年のりる事
 戸の宿はるる 宿をためて思

あまのまふり

猿養者芭蕉翁滑稽之首
諺也

愚考 史記滑稽傳考物云 滑稽酒器
 也 言出口成章 詞不窮 竭若滑稽之
 吐酒也 滑稽 妙美なり 滑稽 詞
 是なり 成美曰 諺 字彙 与響
 同也 字典云 唐 堯 神人 暢 有諺 在
 坐 執 中 為 害 在 責 中 愚考 猿養
 の 句 有 六 窓 一 猿 の 名 吟 首 韻
 と 書 非 有 首 韻 也
 非 比 彼 山 寺 偷 衣 朝 市 頂

冠笑只任心感物写興

而已矣

一書小漢室狙戴鵲冠笑朝市金
圈狙偷衣感元徒亦の介猿の説
しよちしししして記寸小足らん

洛下逸人凡兆去来随

翁遊学棋鼓竹憲躡等

凌節斯有歲屬撰此集

玩弄無己自謂絶起孤

腋白裘者也

愚考孟嘗君の狐腋の白裘

真千金よりして天下を安んずるを

幸娘よあつて秦の囚を逃れ

つとの名求衣有り王褒曰尔金之裘

一狐之腋よりあつて狙毎の猿義ハ此

名求衣より絶超すりといふなり或人疑いて

云天下を安んずるの白裘小賤まよりといハ

ぬゆ言て曰平北の狐を殺して一人の

を乞はんとすのく乞名聞りて宝とす

すりよ是くらん義をまふ引之人間の

兩具をりて獲ふ吾を多し仁情同

日の福よあつたりなり又裘よ義

をを合せしむるる子北の狐の腋中の

毛を撻あつたりを子筋の毛を

よりあつたりして一義の形とありを又

感よ絶しりやも道ハあつて偷衣頂冠

の笑といふはすりよあつたりとあり

於是四方喙友憧之往来

秋海の思ふを以て歌号五巻の蘊奥なるを以て

維也元禄四稔辛未仲夏余掛

錫於洛陽旅亭偶會北来吟席

見需記此夏題昏尾卒援毫不

揣拙庶哉一葉高張有補于詞

海漁人云

愚考維字彙曰凡策書の年月必維字を以て發之

取之時の古字なり稔を穀一葉の義小

をと昏尾を書尾なり王元之曰大張一

網羅群英

